

心臓血管病の一次予防としてのアスピリンで出血リスク増加

低用量のアスピリンは心臓血管病の一次予防に用いられており、結腸直腸がんの予防効果もある可能性も指摘されている。本研究では、心臓血管病の一次予防および結腸直腸がんの予防における低用量アスピリンの効果と副作用についてレビューを行った。

2021年1月から2022年1月までに発表された英語文献のうち、一次予防に低用量（100mg/日以下）のアスピリンを投与し、偽薬を投与もしくは介入なしの場合と比較したランダム化比較試験（11件・134,470例）および1件のパイロット研究（400例）を対象とした。結果、低用量アスピリンは主要な心臓血管イベントの発生を有意に抑制した（オッズ比0.9）。一方で、心臓血管病死や全死亡については、アスピリンによる有意な減少はみられなかった。結腸直腸がんに対する効果については限定的で、追跡期間の長さによって結果に変動がみられ、ランダム化比較試験の期間を超えた長期の追跡で統計学的に有意な結果が得られた。また、低用量アスピリンにより大出血のリスクが有意に上昇し（オッズ比1.44）、部位特異的な出血のリスクも同様に上昇した。

したがって、低用量のアスピリンの服用により、主要な心臓血管イベント発生の絶対リスクはわずかに減少し、一方で大出血の絶対リスクはわずかに増加することが示された。結腸直腸がんについては、アスピリンによる一貫した効果がみられなかった。

出典：Journal of American Medical Association. 2022; 327(16): 1585-1597.